
習作題材[血塗れた,肖像画,睨む,どこにいるの]普段避けている作風でやってみよう！

木戸・山茶花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

習作題材「血塗れた 肖像画 睨む どこにいるの」普段避けている作風でやってみよう！

【Nコード】

N3838Y

【作者名】

木戸・山茶花

【あらすじ】

題材「血塗れた 肖像画 睨む どこにいるの」普段避けている作風でやってみよう！

どこにいるの、そう呼ばれたような気がして、僕は振り返った。
僕しかないはずの美術室で、空耳だろうか。確かに呼ばれたような気がしたんだけど。

夕暮れ時の部屋、血塗れたように真っ赤な空間で、僕は一人、絵を描いていた。別に誰とかどんな、ではない。気の向くままに筆を振るっただけだ。

振るっっている、なんて気取ってみたけれど、別に僕は絵が上手いわけじゃない。どちらかといえば下手な部類で、題材馬、を正体不明の生物に変えてしまふくらいの腕前だ。

だもんだから、たまに言われる。なんで美術部員なんかやってるんだ、ってね。

僕には、苦手＝嫌いという方程式は当てはまらない。下手の横好き、そう思ってもらっていい。

絵筆を握るのは、好きだ。

真っ白な画用紙を前にしたときの清々しさ。そこに絵筆で何かしらを描く楽しさは、なによりも面白い。

まあ、出来上がったものを馬鹿にされるのにも慣れている。僕としては、出来上がったものよりも、出来上がるまでの過程を楽しむために絵を描いているようなもんだ。

どこにいるの、また聞こえてきた。

「誰かいるの？」

聞いてみたけど、返事は無い。そのはずだ。数少ない美術部員は、僕を除いてほとんど幽霊部員みたいなもんなのだから。

この学校じゃ、別に珍しいものでもなんでもない。幽霊部員なんて、そこらへんにいる。部活動への参加を推奨してはいるものの、実際のところなんて学校は管理しじゃない。

僕としては、思う存分絵筆を握れるのでありがたい限りだ。むし

る、作成途中に、余計なヤジが飛んでこないから嬉しい。

それにしても、誰だろうか。睨みつけるように周りを見渡してみても、僕以外の影は無い。

何代か前の先輩達が描いた肖像画があるくらい。あとは、誰とも分らない石膏像か。この教室には、本当に誰もいないはずなのだ。あいにくと、この学校には七不思議もない。壁の肖像画が喋る、なんて話は聞いたこともない。石膏像クンも、無口が売りだ。

どこにいるの、ああ、本当にもう、誰なんだろうか。僕の至福の時間を邪魔するなんて。

仕方ないので、僕は教室のドアを開けてみた。どこにいるの。やっぱり聞こえる。

外では運動部の連中が上がりうとしている。もう下校時刻も近い。つてのに、誰が何を探してるってんだろう。

「どこにいるの？」

声はだんだんと近づいてきている。なので僕は言っちゃった。

「ここにいますよ！」

誰が？ いや、僕がだけどさ。

「へっ！？ほんと！」

よくよく聞いてみれば、声は女子。とてとてと走ってくる足音も軽やかに、セーラー服の女生徒がやってきた。

「ね、ねえ、ここにいますってホント！？」

なんだか熱心に聞かれてしまった。しまった、なんだか真面目な話だっただろうか。

「えーつと、何をお探して？」

「ちよっ！ここにいますんじゃないの？」

「だから、何が？」

「ウチの飼育小屋から逃げたウサギっ！黒くて丸っこくて可愛い奴っ！」

「ああ、あの耳の長い動物ね。いないよ、そんなの」

「えーっ！」

なんだか真面目な話だったらいい。だとしたら、こちらも苛立っていたとはいえ、申し訳ない事をした。

「そろそろ下校時刻なのに……。どうしよう」

さっぱりとしたショートカットを弾ませながら、女の子は息を切らしていた。どうやら、長い間探し回っているらしい。

僕は、つい、出来心と気の毒さと申し訳なさから言ってしまった。「手伝おうか？」

と。後から考えてみると、自分らしからぬ積極的な発言だ。絵筆一筋の僕が、誰かを助けるなんて。

「ほんとっ!？」

女の子は、まるで僕のこの言葉を待っていたかのように、目を輝かせた。勘弁して。

「じゃ、私は学校の中を上から探すから、君は下からお願い。見つけたら、ちゃんと捕まえてね!」

言うが早いのか、大した確認もせずに、女の子は走り出した。しまった、と思うのも遅い。僕は時計を確認し、次に描きかけの絵を片付けながら、女の子の指示に従った。

確か、黒くて丸っこくて可愛いんだっけか。うん、黒い以外、全く手がかりにならない。

とはいえ、言った手前手伝わないわけにはいかない。僕は小心者だ。約束を破るなんてできっこないのさ。

最終下校時刻まであと十分。急がないと、間に合わない。

僕はなるべく足音を立てないように走りながら、一階を回ってみた。ちなみに、一階は技術系の移動教室ばかりで、学年ごとの教室は無い。美術室も一階にある。

技術系の教室には、それぞれの部活があるはずだ。ウサギが迷い込んだなら、悲鳴、とは言わないけれど何かしら騒ぎになってもおかしくない。

それとなく気配をうかがいつつ、僕は教室を見回してみる。だが、残念なことに、一階にはウサギはいなかった。

となると二階か。この学校は、屋上を含めて五階建て。見回るのは、二階、三階、四階だ。

二階は一年生の教室か。僕は二年なので、のぞき回るのに罪悪感は無かった。むしろ、三年生の教室を回っているであろう女の子を心配してしまうくらいだ。

残念なことに、二階にもいなかった。次は三階。残りは三分。女の子も上から見て回っているはずだから、そろそろ合流するかもしれない。

三階に上がると、丁度女の子と出くわした。

どう？ というジェスチャーに、だめだった、と返す。なんだか息の合ったコンビのようだが、これ本当に初対面である。

時間的にも、三階で勝負をつけなければならなさそうだ。

上がってみると、意外にもすぐにウサギは見つかった。消火器の近くで丸くなっていた。なるほど、確かに丸い。体格が。よくあのガタイで、三階まで上れたもんだ。

「よかったあ」

女の子が、心の底から安心していった。なんとなく、僕も良い事したような気分になれてお得だった。

「ありがとね。飼育部って、私しかないから、人手足りなくて……助かったよ！」

「いえいえ。どういたしまして」

なるほど、幽霊部員問題はあちらも同じらしい。

熱心なお礼をそれとなく受け流しつつ、僕は学校を抜け出した。時間ギリギリ。女の子も、ウサギ小屋からダッシュで間に合ったようだ。

「それじゃ、またね」

「え？ あ、うん、また」

いやいや、またねって。僕は君の学年もクラスも名前も知らないんですが。

ぶんぶん振られる腕に、ぷらぷらと振りかえしながら、僕と女の

子は別れた。ああ、なるほど、家は別方面なんですね。どうでもいい情報だ。

結構可愛い女の子だったが、僕が家に帰り、食事を済ませ、風呂に入る頃には忘れてしまった。その頃には、もう次の題材を考えていた。

翌日。さあ、次の絵に取り掛かろうとしたそのときだ、

「どこにいるのー!？」

「またかよっ!？」

昨日と全く同じ声、セリフを聞いて、僕は美術室を飛び出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3838y/>

習作題材[血塗れた,肖像画,睨む,どこにいるの]普段避けている作風でやってみよう

2011年11月9日22時16分発行